

# 新

# 12

2016

新闻版(15版)



# 霧 迅 し

能村 研三

## 箒草

月光のふりけふらせり箒草

昭和二十七年『咀嚼音』

月明に我立つ他は箒草

平成十二年『羽化』

青北風や鏘朱にくすむ佐近詩碑  
掛稲の留め干しにあるささげかな

あら草に畦結界の曼珠沙華

実むらさき正座が常の父なりし

十一月に北陸勉強会が開催されたが、今回はそのサブテーマに「北陸能登へ先師句碑を訪ねる勉強会」と銘打った。和倉の句碑建立から十六年、羽咋の句碑建立から十年が経った。まだこの句碑を見ていない会員がおられるのでこの企画となった。今回最初に訪れたのは、羽咋市寺家正覺院境内にある句碑。

月明に我立つ他は箒草

能村登四郎最晩年の句で、句碑の揮毫は書家の那須大卿氏に依頼したものである。

この句、冒頭に掲げたが、箒草をイメージした句が初期の頃昭和二十七年作の『咀嚼音』に載っているのを知った時は驚いた。モチーフから

潮頭し ばし 目で追ふ 雁渡し

障子貼り 空気緻密となりてをり

八幡界隈吟行

露路地の 八幡登四郎 白葉女

秋声や 方位失ふ 八幡路地

岡崎額田

強右衛門 磔刑の野は霧疾し

積み揃へ 良き猪垣の爽気かな

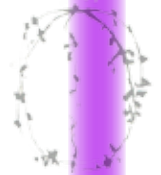
長年自らの中で推敲を重ねて、一つの句が生まれる過程をありありと窺い知ることができた。こうしたことから、自らの「季語別句集」の作成を嫌った登四郎の謎を垣間見ることができた句である。

ところで、先日いすみの家に行っている時、ガーデンングの店で箒草を見つけた。これは箒の材料となる草で、生えている状態も、箒に似てこんもりとしている。高さは一メートルくらいで、根本から多数枝分かれし、披針形の柔らかい葉で覆われる。夏、黄緑色の小花を穂状につけ、秋に食用になる実をつける。葉は、秋に赤く色づく。

コキアとも呼ばれ、最初は洋物の草花であるかと思ったほどだが、古くは源氏物語にも出てくる。今回は三鉢を買って、八幡の家のポストの近くに植えた。

いずれ機会があつたら、羽咋の句碑のそばにも箒草を植えてみたいものだ。

# 蒼茫集



琥 珀 溯 上 千 津

われにかフエ小鳥に真水八雲の忌  
風の秋琥珀ふれ合ふネツクレス  
虫しぐれ縫はず忘れずお針箱  
本歌取多き秋夜の酒すこし  
楷書すでに書けぬ齡よぬかご飯  
指編みの毛糸鴉色自愛かな

草 の 花 大 畑 善 昭

早起悼 工藤節朗さんきの君が花野を行くが見ゆ  
草の花二つの山に雲もなく  
月祀る縁側のある家に住み  
役終へし案山子が凄み利かせぬ

曼珠沙華余熱の色をまだ残し  
一日が水色さるとりいばらの実

小鳥来る 菅谷たけし

ぶり返す秋暑闇抱く藪知らず  
境内の整然とせり鬼やんま  
巡業の櫓太鼓や秋気澄む  
地球儀を回すごとくに秋の雲  
富士塚といふ虚へ登る秋の雲  
まなざしといふ語やはらか小鳥来る

雑 茸 甲 州 千 草

敬老日検索といふ知恵袋

ばおーんと朝露を発つ新幹線  
日とともに東北大山形支部にて淑子さん来る小鳥来る  
刈る前の稲田鎮めか雲低し  
雑草火照る訛で売られをり  
いなご跳ぶ塩屋煙草屋あつたはず

苔の洞ろ 矢崎すみ子

走り根に苔の洞ろや露深深  
幽玄の露露露や苔の黙  
山上の湖コバルトに秋澄めり  
天空へ噴火の記憶秋の湖  
まほらまの空まほらまの稲の花  
忽然と雲湧く峰や松虫草

国 訛 林 昭 太 郎

ゆつくりと今日の閉ぢゆく夕花野  
鳥渡り終へて夕空のこりけり  
銀漢や仰ぐといふは思慕に似て

米櫃の米あたたかし十三夜  
鳥渡る砥石に水を吸はせれば  
草の絮吹いて隠さぬ国訛

枳の实 広渡敬雄

秋茄子に映つてゐたる赤ん坊  
小鳥来る遠野わらしを待ちをれば  
譲らるる創刊号や秋の蠟  
窯出の余熱ありけり葛の花  
轍あり枳の実ひとつめり込みて  
金星や茸山より下りて来て

下 校 刻 成宮紀代子

猫じやらししごかれ通る下校刻  
田舎味噌どんと落とせり芋煮会  
咲き散らす百日紅の力瘤  
返り花どこにも合はぬ鍵一つ  
秋闌けて酒の名千寿万寿とや  
駅なかにゐて短日を忘れをり

夜会服 千田百里

夜会服のやうな金魚を貰ひけり  
人は何故都を目差す雲の峰  
紅玉を嚙むや鼓膜に響かせて  
尺八の哭声節竜淵に潜む  
路地・小路好きで迷うて菊日和  
翔師の忌近し胡桃を割らず置く

琥 珀 辻美奈子

球体は水纏ひを力武部の実  
たれかれの影の大きな茸狩  
虫すだくすこし忘れて死者のこと  
ヴァージンオーヴオイルの琥珀秋気満つ  
悪なすびと言はれてくやくしくはないか  
飲めば水身ぬちにまろく落ちて秋

とりあへず 大川ゆかり

タンバリンのりぼん三色小鳥来る

間引菜に星屑降らすやうに塩  
とりあへず月と一献酌み交はす  
もさもさと茸炒めてゐる男  
茶立虫枕の位置の定まらず  
声に色あらば銀色鹿鳴けり

累 々 吉田政江

棒稻架の縦列揃ふ出羽盆地  
芋の露額田の猪垣吟行ふるんと跳ねて出羽詣  
三つ石へ鎮魂の霧立ち上る  
猪垣の累々の棋羅若むせり  
つはものを称へ三河の曼珠沙華  
列逸れて万足平の栗拾ふ

鬼やんま 森岡正作

神将のくわつと秋の蚊を吐けり  
銀漢を背負うて最上川おらぶ

曲屋の曲り愉しみ鬼やんま  
倒木も舟出の構へ霧の湖  
木道に打ち寄す苔や霧流る  
みのこづち放浪癖の今もなほ

山の音

樋口英子

秋なれや園吹く風と空の色  
マスカットひと粒ごとの褒め上手  
銀杏の爆ぜて太古のひすい色  
茱萸熟れていつか亡母の顔となる  
朴散華老いねば見えぬものあり  
烏瓜引けばかすかな山の音

危ふかり

楠原幹子

とんばうと石の温みを分ちをり  
千本公孫樹に遊び足らぬか穴まどひ  
桔梗や水木洋子の佇まひ  
魯田の今青々と古戦場

猪垣の剛堅にして美感あり  
ねこじやらし判断力の危ふかり

曲線の技

頓所友枝

葡萄棚織悔のやうに屈みゆく  
八朔や目覚めの白湯をひと吹きす  
こぼれ萩いつも会へども名を知らず  
曼珠沙華曲線の技極めけり  
木の実落つ鎌倉行十六井戸の水音楚々  
武士の世の残り香確とこぼれ萩

沈思

松井志津子

雨つづく沈思のさまに葉鶏頭  
酔芙蓉前言易易とひるがへす  
関あげてゐる城跡の曼珠沙華  
空支ふ鶏頭の槍炎立つ  
山際の没日燃え立つ真葛原  
浜住みの消灯早し天の川

# 潮鳴集



日 暮 菊地光子

棕鳥や旅の日暮はすぐに来て  
シンバルの最終楽章豊の秋  
秋暑し背開きといふエレベーター  
嬰の眼の一直線や雲の峰  
さざ波に月ゆらゆらと秋深む

鳥 渡る 三好千衣子

猪垣に山気の緊まる奥三河  
強右衛門の馳せし山峡鳥渡る  
露けしや路傍にひそと兵の墓  
千枚を育てし田水落しけり  
神留守の神島いだく膨れ潮

五 稜 郭 齊藤 實

秋草や特攻基地の先に海  
無花果の魔界の色を食べにけり  
オクラ切る形はでんと五稜郭  
秋晴の雲申し訳なく動く  
浮くやうに子等の連れ立つ大花野

後 の 雛 内山花葉

山寺の山押し寄せてくる残暑  
志納品は花一きんや後の雛  
寸言にはつと打たるる稲光り  
幻聴や朴の落葉の山に入り  
膝に組む十指に秋の来てゐたり



霧 底 峰崎 成規

闇裂きて闇あらたむる稲光  
霽れて酌み無月なほ酌む月の山  
本意なき相鎚いくつ木の実落つ  
霧底の霧膨らます対向車  
真つ新な影に会はんと障子貼る

山 河 菊川 俊朗

青北風や石を乗せたる屋根の数  
鳥渡る地べたに釘を刺す遊び  
石榴酸っぱしもう戻らない時間  
鳩吹いて山河応ふることもし  
鬼灯や大人になつて分かること

指 定 席 篠藤 千佳子

豊年やゆつくり倒す指定席  
秋めくや奥へ奥へとローカル線  
石積みの色みな違ふ曼珠沙華  
美容師に見送られたる秋の昼  
桔梗や玄関にある明かり窓

初 鴨 多田ユリ子

初鴨の眩しき水輪放ちけり  
おしろいの花やいつもの帰り道  
耳裏を風の過ぎたる鬼城の忌  
鰯雲こころ遠くへ行きたがる  
名水を汲む列にみて秋惜しむ

松 の 色 能美昌二郎

それぞれに一つの宇宙草の露  
一語づつ区切る宣誓鰯雲  
葉月潮船よりでかい波が来る  
肩に来る蜻蛉に草の匂ひかな  
全山の紅葉を正す松の色

風 船 葛 大沢美智子

図書館の一枚硝子小鳥来る  
風船葛ふるふるたれが息入るる  
曲屋の屋根草そよぎ秋燕  
労ひの色となりたる秋茄子  
下り梁燠火均して帰りけり

# 沖作品



小津映画秋刀魚の味はほろ苦し  
雲流る八ヶ岳真向ひに稲架組みて

長野 柴田ふさこ

稲掛や人黙黙と夕間暮

氏 姓 堅き絆や小宮祭

摺りたての新米人肌のぬくみ

福岡 吉武 美子

鍬洗ふ水の流れと虫の音と

爽籟や染めの濁りをすすぐ水

天麩羅の具材輪切りにせる雨月

三つ編みの藁のほどけし案山子の娘

秋声に水蜘蛛の術ありさうな

ふるさとの闇の深さや星月夜

水澄むや浅瀬に浮かぶ石の紋

秋暑しニュースのあとのコマーション

朝顔の蔓のわがまま許しけり

送り火のあとの闇夜の深さかな

千葉 塩野谷慎吾

# 能村研三選

屋ちちろ真間全山を膨らまし  
賜猛り一山紅く燃え立たす

市川市 藤代 康明

逆光の武蔵野目がけ鳥渡る

見上げれば山に慰霊の月ひとつ

藍浴衣永ちやん語る江戸文化

神奈川 大矢 恒彦

鰯は水脱ぎ捨てたくて高く跳ぶ

棚田みな小さき水平豊の秋

精霊の話の似合ふ茸狩

乱切りに恋の噂も芋煮会

秋澄むや詠み手読み手のよき間合

秋霖や銹色深む左近詩碑

チマチヨゴリ色なき風を孕みたる

台風の迷走知恵の輪の解けず

糠床の機嫌よろしき豊の秋

決断はひぐらしの駅降りてから

市川市 小林 陽子

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

氏 姓 堅 き 絆 や 小 宮 祭 柴田ふさこ

今年は七年に一度の諏訪大社の御柱祭の年で、私も初めて見に行った。御柱祭は諏訪大社の上社、下社で行われたが、諏訪大社だけでなく、諏訪地方にある大社ゆかりの神社は勿論、直接関係のない産土神や道祖神にいたるまで、御柱を曳いたり建てたりする行事が、夏の終わりから秋にかけて催された。こちらの方は地域性もあり、集落ごとの血縁縁者の深い繋がりの中で行われることが多いようである。

秋 声 に 水 蜘蛛 の 術 あり さ う な 吉武 美子

「秋の声」という季語は抽象的であるので具体的に説明する

のは難しい。秋になると物音も敏感に感じられ、すべてその響きはしみじみと胸に染み入る。列国の人には理解できないだろうが、私たち日本人には具体的な音ばかりでなく、心に響いて来る秋の気配もまた、秋の声と言えよう。水馬が水の上を滑るように、忍者の術で「水蜘蛛の術」というのがあって、水の上を歩く忍者がよく描かれているが、実際「水蜘蛛」は、下駄の周囲に、木で出来た浮きを両足につける事で、水の上を歩く事ができたようだ。秋の澄んだ水面を滑るように走れる夢は面白い

送り火のあとの闇夜の深さかな 塩野谷慎吾

「迎え火」「送り火」は盆の行事のひとつだが、門口で芋殻などを焚く。盆の間、この世に戻ってきていた精霊を彼岸へと送る火で、精霊の帰り道を明るくして、帰りやすくするのである。近年に近親者が亡くなった家では、送り火は特に切ない気持ちにさせられる。火が消えた後の闇夜の深さは一人である。

屋 ち ち ろ 真 間 全 山 を 膨 ら ま し 藤代 康明

真間山弘法寺は私が住んでいる市川市内にある古刹の一つ。その創建は奈良時代にまで遡るといわれ、弘法寺のある真間山の下は、入り江になっており「手児奈の伝説」でも有名である。こんもりとしたお山には、屋でも蟋蟀が盛んに鳴いている。この句「全山を膨らまし」の表現が面白い。〈以下略〉